



イラスト：永田信行

Contents

- モニタリングサイト1000概要版パンフレットができました！…P1
- 生物多様性センター成果物に関する情報提供を行っています！
- クマとカモシカの生息分布図を公表しました！……………P2
- 「巨木を語ろう全国フォーラム」に参加しました！
- 環境DNA分析技術を用いた淡水魚類調査手法の「手引き」を作成しています！…P3
- 「インターネット自然研究所ホームページ」リニューアル
- モニタリングサイト1000ニュースレター……………P4～P7
- CITES附属書掲載種の識別研修を開催しています！……………P8
- 第22回自然系調査研究機関連絡会議（NORNAC22）を開催！
- 生物多様性や自然環境に関する講演を実施しました！……………P9
- 生物多様性センターの企画展示とイベント
- 標本紹介 第29回……………P10

表紙のイラスト

日本各地の生物多様性を1枚の絵巻にして表現した「つながりんぐ」から一部を抜粋しました。アオタテハモドキやオオゴマダラ、オオトラツグミをはじめ南西諸島で見られる様々な生きものが描かれており、生きものたちのつながりが表現されています。絵巻の全体は生物多様性センターの展示室でご覧いただけます。

環境省 自然環境局



生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan



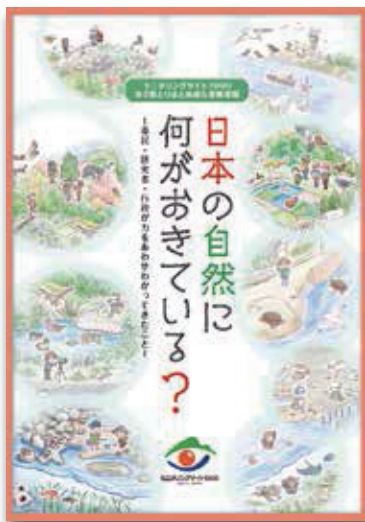
●モニタリングサイト1000概要版パンフレットができました！

モニタリングサイト1000の特徴や、モニタリングの必要性、各生態系の成果を取り上げ、「日本の自然に何がおきている？ー市民・研究者・行政が力を合わせわかってきたことー モニタリングサイト1000第3期とりまとめ報告書概要版」を作成し、報道でも大きく取り上げられました。生物多様性やモニタリングの重要性について理解を深めること、生物多様性保全のために何ができるのか考えること、保全施策への活用を促していくことを大きな目的としています。生物多様性センターのモニタリングサイト1000ウェブサイトでも公開していますので、ぜひご覧ください。



■モニタリングサイト1000 報告書

<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>



モニタリングサイト1000第3期とりまとめ報告書概要版パンフレット

イラスト：一日一様

●生物多様性センター成果物に関する情報提供を行っています！

生物多様性センターの主な役割は「調査」、「資料収集」、「情報提供」、「国際協力」ですが、その中でも、集めた各種データを社会にフィードバックしていく「情報提供」は、自治体や研究者、保全団体、民間企業など多くの方々にご活用いただく意味でも大変重要です。

このため生物多様性センターでは、昨年度より各種調査の報告書や速報、記者発表などの情報をメールで随時お知らせする取組みを開始しました。組織又は課室を代表するメールアドレスを下記連絡先まで登録いただければ、このような最新情報を受け取ることができます。

■生物多様性センター biodic_webmaster@env.go.jp

また、生物多様性センターの所有する各種成果物は、データ単体としても重要ですが、他の各種データと組み合わせることで、各種施策立案や調査・研究などへのさらなる貢献が期待できます。

例えば、国立研究開発法人国立環境研究所と帯広畜産大学の共同研究チームは、生物多様性センターの第5回自然環境保全基礎調査哺乳類分布図と、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所が整備・公開している「遺跡データベース」等のデータを組み合わせることで、古墳時代や近世で製鉄・製陶が行われていた地域においては、現在においてもなお小型哺乳類の多様性が低い、との興味深い論文を発表しています。

●研究発表 <http://www.nies.go.jp/whatsnew/20190802/20190802.html>

今後もぜひ、生物多様性センター成果物を一層ご活用いただき、各種施策立案や調査・研究などにお役立てください。

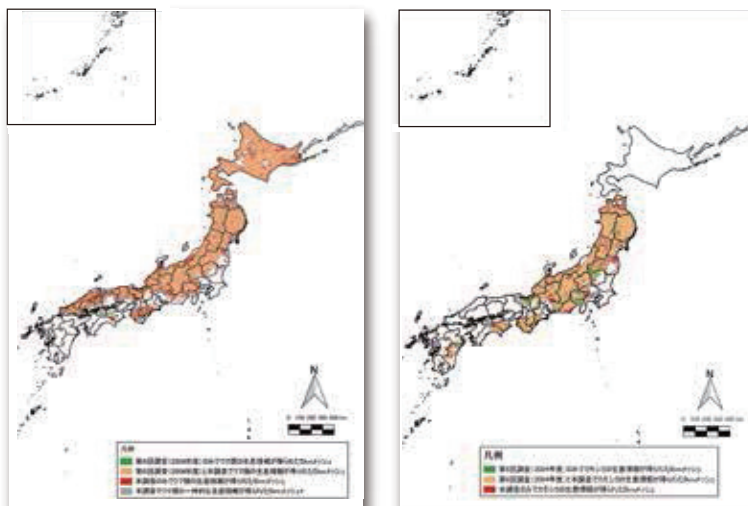
●クマとカモシカの生息分布図を公表しました！

北海道に生息する「ヒグマ」と、本州以南に生息する「ツキノワグマ」・「カモシカ」の生息分布状況を6月にとりまとめて公表しました。

前回調査が2003年度公表でしたので、約15年の変化をみてみると、生息情報が得られた地域はクマ類では約40%、カモシカでは約8%それぞれ拡大していました。特にツキノワグマは中国地方と近畿地方で大幅に拡大している状況がみとれます。

みなさんのお住まいの地域ではどうでしょうか？近年、都市部においてもクマの目撃情報が度々、報告されています。野生生物と人の共生のあり方について考える資料の1つ

として活用いただけますと幸いです。詳しい情報は生物多様性センターのウェブサイトに掲載していますので、ぜひ一度ご覧ください。なお、本調査は個体数の増減を示すものではなく、また、クマについては行動範囲が広いいため、恒常的な生息ではなく、一時的な出没の可能性もありますのでご注意ください。



クマ類分布図

カモシカ分布図

●「巨木を語ろう全国フォーラム」に参加しました！

「巨木を語ろう全国フォーラム（以下「フォーラム」という。）」は、日本各地の自治体と、巨樹の愛好家団体である全国巨樹・巨木林の会が毎年共催している会合で、今年は第32回目のフォーラムとして、「巨木を語ろう全国フォーラム福岡・宇美大会」が10月19日（土）に福岡県宇美町で開催されました。

生物多様性センターは、自然環境保全基礎調査の一環として巨樹・巨木林調査を実施しており、全国巨樹・巨木林の会の会員各位からも多大なご協力をいただいていることから、毎年、フォーラムに出席し、巨樹・巨木林調査のさらなる推進に努めています。今回フォーラムでは、福島 俊彦氏（福岡県林業技術者連合会会長）の基調講演「巨樹・巨木と人々の生活」や、パネルディスカッション「巨樹・巨木と向き合い考える」での宇美八幡宮の「湯蓋（ゆぶた）の森」「衣掛（きぬかけ）の森」の歴史や保全活動の結果報告、福岡県の巨樹の紹介、会員の活動報告の紹介があり、森林の生態系保全機能や、巨樹の保護のあり方について熱心な議論が交わされました。

その後開催された交流会では、地元の「宇美太鼓」が披露された後、賑やかに巨樹の話題が交わされるなど、さらなる巨樹・巨木林調査の促進に向け、大変有意義な場となりました。



衣掛の森
(湯蓋の森とともに国指定の天然記念物)



フォーラムでの生物多様性センター長祝辞



交流会で披露された地元宇美町の「宇美太鼓」

●環境DNA分析技術を用いた淡水魚類調査手法の「手引き」を作成しています！

近年、急速に発展してきた環境DNA分析技術は、1Lの水からその中に含まれる生物のDNAを検出することで、生息している生物の種を把握することができます。環境DNA分析技術は、優れている部分も多くある中で、課題も多々ありますが、活用の仕方によっては従来の捕獲調査の場合よりも効力をより発揮する可能性があります。そのため、きちんとした調査成果を得るためには、万能な調査手法ではないことをしっかり理解することが大切です。

現在、生物多様性センターでは、環境DNA分析技術がこういったものなのかを理解いただけるよう、「これから調査をはじめたい」「効果的な調査にしたい」と考えている行政担当者や保全団体の人たちを対象に、一般向けの内容とした「手引き」の作成を進めています。特に、環境DNA分析技術の基礎的知見、現地調査、分析結果の解釈などについてまとめることとしています。

この「手引き」は、令和2年6月頃を目処に公表する予定としていますので、各調査のお役に立てていただければ幸いです。



手引きの素案



環境DNA調査

http://www.biodic.go.jp/edna/edna_top.html



投網による捕獲調査



環境DNA調査のための採水

●「インターネット自然研究所ホームページ」リニューアル

生物多様性センターでは、国立公園や野生生物のライブ画像を配信する「インターネット自然研究所」システムを運用しており、尾瀬や屋久島など国立公園の風景や、タンチョウなど野生生物の様子を画像として1時間更新で配信するほか、2002年から蓄積した過去の画像もあわせて提供しています。

現在、全国51箇所のカメラからライブ画像を配信しており、カメラの設置場所であるビジターセンター等の利用案内や、周辺情報を提供することで国立公園の利用促進も図っています。

この度、「インターネット自然研究所」のウェブサイトを親しみやすいデザインに一新、より快適にライブ画像を閲覧できるようシステムをリニューアルしました。日本の自然の豊かさを実感できる「インターネット自然研究所」をご覧ください。



■インターネット自然研究所ライブ画像

<https://www.sizenken.biodic.go.jp/>



【インターネット自然研究所】トップページ

1. 高山帯

ミヤマモンキチョウvs.モンキチョウ？

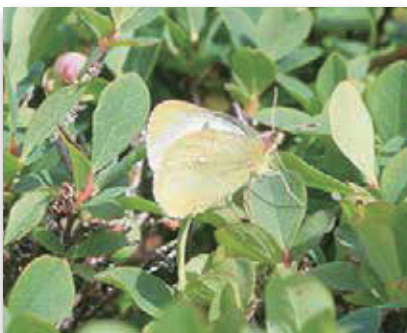
一般財団法人 自然環境研究センター 小出 可能

地球温暖化の影響を受けて高山帯で起こるかもしれない環境変化として、低標高性の動植物が増加し、高山帯特有の生物が減少することがあげられます。モニタリングサイト1000高山帯調査では、ミヤマモンキチョウなどの高山蝶をおもな対象種として調査する一方、モンキチョウなどの低標高性のチョウ類も記録しています。

2018年の北アルプスの蝶ヶ岳では、低標高性のモンキチョウが、定点調査とライントランセクト調査を合わせて7個

体、調査時間外も含めると9個体と、2010年の調査開始以来、最も多く確認されました。またこの年の南アルプスの北岳の調査でも、標高2,200m付近のお花畑で、高山蝶のベニヒカゲに交じってモンキチョウが数個体確認されました。

高山帯で確認されたモンキチョウが、麓から飛翔してきたのか高山帯で発生しているのか、個体数が増加してミヤマモンキチョウに影響を及ぼすのかは、まだ明らかではありません。チョウ類の発生時期は調査した年の気候で変わりますし、チョウ類の確認個体数は調査日の天気で左右されます。こうした影響を考慮してデータを分析しながらモニタリングを続ける必要があります。



ミヤマモンキチョウ
2019年8月12日 蝶ヶ岳
(撮影者：福本 匡志)



モンキチョウ
2019年8月5日 蝶ヶ岳
(撮影者：斉藤 雄太)

2. 森林・草原

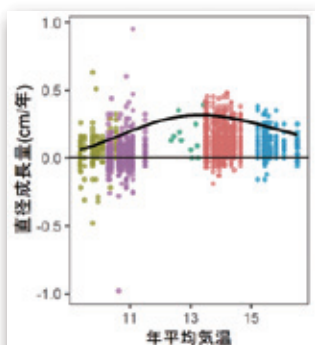
気温によって樹木の成長はどう変わる？

一般財団法人 自然環境研究センター 日野 貴文

森林・草原調査では、全国各地の森林に100m四方の調査区を設定し、その中に生えている直径5cm以上のすべての樹木の太さを、毎年または5年に一度計測しています。このデータを用いて、種ごとに気温と成長量との関係を解析したところ、多くの種で、気温に伴って成長量が変化する様子が明らかになりました。例えば、西日本の山間部によく見られる常緑樹のソヨゴは、年平均気温が13℃程度のときにもっとも成長がよくない傾向がありました(図)。これらの結果から、今後気温の上昇が進んだ場合に、各地域でどの種の成長がよくなり、どの種の成長が悪くなるかを予測することが可能となります。

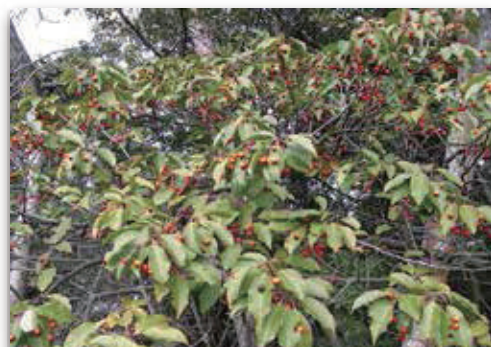
このような解析ができるのも全国各地の森林で、長期間に渡って、1本1本の木の太さを測り続けるという大規模かつ地道な調査のおかげです。そして調査年が増えるほど推定精度も高まります。気候変動によって日本の森林がどのように変わっていくかを予測するために、今後も継続してデータを蓄積していくことが重要です。

ソヨゴの成長量と年平均気温との関係。点は、各調査年における各個体の直径成長量を表す。曲線は、平均的なサイズの個体の成長量(推定値)を表す。



調査区

- 愛知赤津(愛知県)
- 芦生掛上谷(京都府)
- 市ノ又(高知県)
- 上賀茂(京都府)
- 和歌山(和歌山県)



ソヨゴ (撮影者：小出 可能)



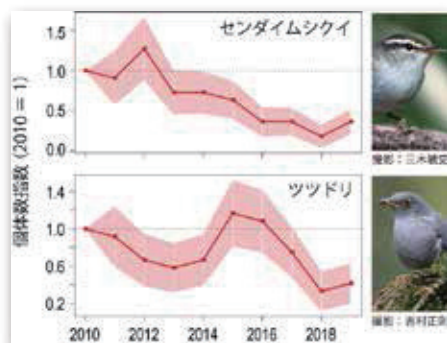
3. 陸生鳥類

シカによる下層植生改変の影響が藪の鳥を通してカッコウ類へも

NPO 法人 バードリサーチ 植田 睦之

シカの摂食による下層植生の改変がいろいろな生物へ影響を与えています。鳥への影響も大きく、シカの影響の顕著な森林では下層植生を生息場所とする鳥たちが減っていることが明らかにされています。そしてその影響がさらにそれらの鳥たちに托卵するカッコウ類へも及んでいることが分かってきました。

シカの影響が軽微な森林では、下層植生を利用する鳥はもちろんのこと、托卵性のツツドリやホトトギスの個体数にも大きな変化はないのですが、シカの影響の大きい北海道の苫小牧研究林や埼玉県の大山沢では、センダイムシクイやエゾムシクイが減少しており、それに托卵するツツドリも減少していたのです。そして、宮崎県の綾では、ウグイスが減少し、それに托卵するホトトギスも減少していました。シカの影響を受けている鳥にはコルリもいて、コルリにはジュウイチが托卵します。今回の解析ではその変化は解析できませんでしたが、影響が出ているかどうか注目していきます。



埼玉県大山沢におけるセンダイムシクイとツツドリの記録数の変化

4. 里地

調査講習会の開催や講習動画の作成を進めています

公益財団法人 日本自然保護協会 福田 真由子



チョウ類調査講習会の様子 (2018年6月30日神奈川県横浜市)

里地調査は、全国の市民が調査の主体であり、データの精度を保つために調査手法の統一が欠かせないことから、調査の意義や手法を伝える調査講習会の開催に力を入れています。第4期には、これまでに神奈川県・愛知県・大分県など全国7ヶ所で調査講習会を開催し、調査員の方だけでなく、中学生・大学生など一般の方々も参加されました。調査講習会は調査・保全のための情報交換の場にもなっており、モチベーション維持にもつながっています。

一方、里地調査の調査項目は、植物相やホタル類調査など9項目あるものの、調査講習会の開催地点や回数が限られており、開催地から遠方の場合に参加が難しく、調査が開始できないという課題がありました。そこで、調査員の参加負担軽減のために、今年度、調査講習のための動画作成を始め、2019年8月には哺乳類調査の講習動画が完成しました。

今後も直接交流ができる調査講習会を開催し、より多くの調査員が参加できる体制を作っていきます。

5. 陸水域

屏風山湖沼群サイトで希少な水生植物ガシャモクを確認

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 金子 誠也

陸水域調査では、湖沼と湿原の2つの生態系に着目し、モニタリング調査を実施しています。2018年の湖沼調査では、新たに5か所（水生植物調査サイト3か所、淡水魚類調査サイト2か所）の調査サイトを設けました。新設した水生植物調査サイトのうち、青森県の屏風山湖沼群サイトでは、希少な水生植物であるガシャモクが確認されました。

屏風山湖沼群は、青森県津軽半島西海岸の屏風山地域に位置する日本有数の湖沼地帯です。湖沼群の中から複数の湖沼を選んで調査を行ったところ、計86種の水生植物が記録されました。これらのうち17種は環境省が定めるレッドリストに掲載されている希少種であり、本サイトが多様性の高い水生植物相を有していることが分かりました。特に、絶滅危惧 I A類に指定されているガシャモクは、当事業では初めての記録となりました。

その一方で、湖沼によっては園芸スイレンなどの外来種が繁茂する様子もみられました。本サイトの水生植物の多様性を維持するためにも、引き続き継続的なモニタリング調査を実施していく必要があります。



屏風山湖沼群サイトで確認された水生植物希少種のガシャモク (左) と外来種の園芸スイレン (右) の様子

6. ガンカモ類

ハクチョウ類は南へ行くほど幼鳥が多くなる

NPO 法人 バードリサーチ 神山 和夫



オオハクチョウの家族群 灰色をしているのが幼鳥
(写真提供：NPO法人 バードリサーチ)

ハクチョウ類は、その年に生まれた幼鳥の体は灰色をしており、白い成鳥と区別して個体数をカウントすることができるため、幼鳥率（幼鳥数/全個体数）を算出できます。モニタリングサイト1000に加えて、環境省の渡り鳥飛来状況調査とバードリサーチのボランティア調査のデータを使用して、2008年度から2018年度の11月から翌年の3月までに50羽以上が記録された群れの幼鳥率を分析したところ、オオハクチョウ、コハクチョウともに、どの月も南へ行くほど幼鳥率が高くなる傾向がありそうです。

成鳥よりも寒さに弱い幼鳥を連れた家族群が、気候が温暖な南寄りの地域で越冬している可能性が考えられます。今後、国内の気候の温暖化が続くと、越冬している幼鳥の分布が変化するかもしれません。今後、さらに解析を進めていきます。

7. 沿岸域

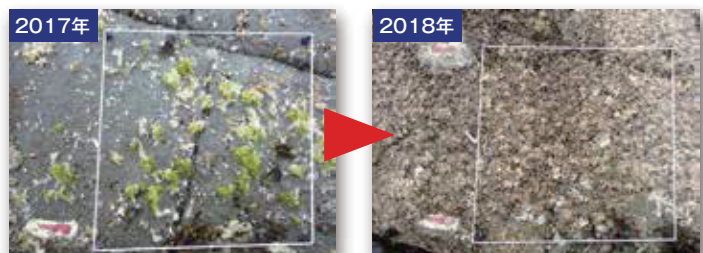
大阪湾と南紀白浜サイトでみられたケガキの増加

NPO 法人 日本国際湿地保全連合 上野 綾子

沿岸域では、2008年から磯・干潟・アマモ場・藻場生態系を対象にモニタリングを進めています。

磯では、日本各地に設置された6箇所の調査サイトにて、毎年同じ場所（方形枠内）の写真を撮影し、特定の種の出現の有無を記録しています。安房小湊（千葉県）、大阪湾（大阪府）、南紀白浜（和歌山県）、天草（熊本県）の4サイトでは、特定種の一つとしてケガキの出現を調べており、大阪湾と南紀白浜サイトでは、2017年以降、ケガキが見られた方形枠の数が増加していました。特に、大阪湾サイトでは、2011年から2017年までの7年間でケガキがみられた方形枠数が1から6枠の間を推移していましたが、2018年は11枠となり、急激な増加がみられました。

ケガキは青森県陸奥湾から鹿児島県奄美大島まで分布している種ですが、環境変化に伴って個体数の増減や、他のカキ類と入れ替わる可能性があるため、モニタリングでも注目している種です。今回確認された変化は、一時的なものである可能性もありますが、環境変化の兆候を捉えている可能性もあります。今後もモニタリングを継続し、全国でも同様の変化がみられるか注視していく必要があります。

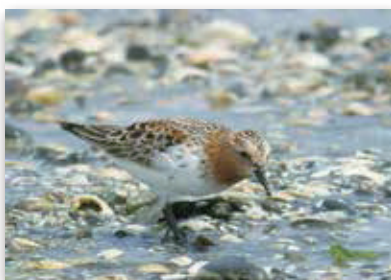


ケガキが増加した様子。大阪湾サイトの同じ場所で撮影された写真
2018年にはケガキで岩盤が覆われていました。(撮影者：石田 惣)

8. シギ・チドリ類

トウネンの減少傾向が確認されました

NPO 法人 バードリサーチ 守屋 年史



トウネン 春期の夏羽



2000~2019年におけるトウネンの最大個体数の推移

トウネンは、スズメほどの大きさのシギ類（写真）で、北極圏の繁殖地と越冬地である東南アジアやオーストラリア地域を行き来し、春期と秋期に日本の湿地に渡来する渡り鳥です。

最近になり、現地の調査員から非常に数が減ったという報告を受けています。実際にデータをまとめると、近年優占種の順位を下げ、個体数が減少しています。2000年台前半は春期と秋期が同じような推移をして増加傾向にありました。その後2007年頃から秋期は増減を繰り返しながら徐々に減少傾向と

なり、春期は2012年頃から急激に減少してきています（図）。今年（2019年）の春期は最も減少数の大きい種になり、地域では、九州の氷川や白川河口などの有明海・八代海、塩浜海岸や三番瀬などの東京湾、野付崎・尾岱沼、濤沸湖などの北海道東部地域で、前年春期調査と比べて減少が大きくなりました。

現在、春期、秋期とも過去最少個体数をまだ下回っていませんが、現状の減少傾向から考えると注意すべき状況と考えられます。



9. サンゴ礁

大規模白化現象からの回復と台風被害

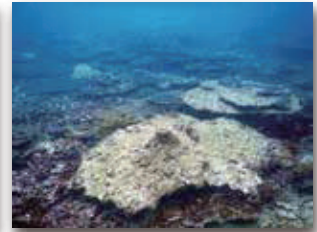
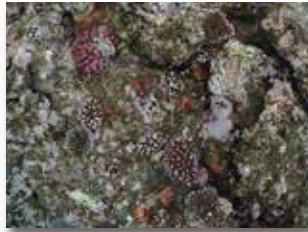
一般財団法人 自然環境研究センター 木村 匡

2016年に沖縄から奄美に至るサンゴ礁域で起こった大規模な白化現象から3年がたちました。大きな被害を受けた宮古島や石西礁湖では、2018年には直径5cm程度の小さな群体（稚サンゴ）が多数観察され、回復の兆しが見られました（写真1）。2019年の調査では、それらの稚サンゴの成長が確認されており、今後、サンゴ被度にも増加傾向が現れることが期待されます。しかし、石西礁湖の一部では、堆積物による死亡が見られ、回復が遅れている地点もあります。

一方、2018年は和歌山県や高知県、鹿児島県等の高緯度サンゴ群集域に台風が多く、九州から四国では卓状や枝状のサンゴの破損が目立ちました。2019年にも大型の台風が本州を縦断して各地に災害をもたらしましたが、サンゴ群集への影響が心配されます（写真2）。



(写真1) 石西礁湖で見られた稚サンゴ
サイト13~16: 石西礁湖 (撮影者: 木村 匡)



(写真2) 台風のため倒壊した卓状ミドリイシ群体
サイト23: 鹿児島県南部沿岸 (撮影者: 出羽 尚子)

10. 海 鳥

日本で繁殖するカモメ類の数が減っています

公益財団法人 山階鳥類研究所 富田 直樹



オオセグロカモメ

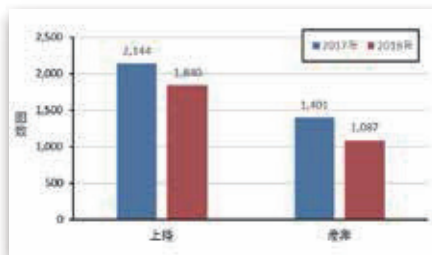
2014年9月発行のニュースレターで北海道東部のオオセグロカモメの減少についてお知らせしました。これに関連して本調査データを含む海鳥コロニーデータベース (<http://www.sizenken.biodic.go.jp/seabirds/index.php>) を活用し、北海道大学や山階鳥類研究所などが共同で日本の主要な海鳥10種の過去36年間の全国的な個体数変化の解析を行いました。その結果、絶滅危惧種のウミガラスやエトビリカだけでなく、日本で広域に分布し、1年中どこかの漁港などで観察できる馴染みのウミネコとオオセグロカモメの個体数減少も明らかとなりました。減少の原因は餌の資源量の枯渇などいくつか考えられますが、はっきりした因果関係はまだ分かっていません。

海洋生態系の頂点に位置する海鳥の増減要因を明らかにすることは、海鳥の保全にとどまらず海洋の環境変化を知ることもつながります。しかし、解析できるほど十分なデータの蓄積がある海鳥種はまだほんの一部であり、本事業を継続することの必要性が再認識されました。本成果は、鳥類保全学の専門誌『Bird Conservation International』のオンライン版 (<https://doi.org/10.1017/S0959270919000352> [2019年8月28日公開]) に掲載されています。

11. ウミガメ

新体制でスタートしたウミガメ類調査！

モニタリングサイト1000ウミガメ類調査は、地元のボランティア、地方自治体、NPO法人、水族館や博物館など様々な方たちが独自に調査・保全活動をしているなかで得られた貴重な情報（上陸・産卵回数、砂浜の状況等）を提供いただき成り立っています。平成16（2004）年度から始まった本調査ですが、より充実した情報に基づいたとりまとめができるよう調査体制やデータ取扱規約の見直しを行い、平成30（2018）年度より、新たな体制で再スタートしました。



2017年と2018年におけるアカウミガメの上陸・産卵回数
※ただし、年により調査砂浜数は異なる（2017年：123浜、2018年：118浜）
砂浜により調査方法及び調査頻度は異なる



上陸したアカウミガメ
(写真提供: NPO法人日本ウミガメ協議会)

平成30（2018）年度調査では、2017年から2018年の調査結果についてデータを提供いただき、解析をしました。2018年におけるアカウミガメの上陸回数と産卵回数は、それぞれ1,840回と1,087回であり、2017年の2,144回と1,840回と比較して、上陸回数は約15%、産卵回数は約22%減少しました（図）。上陸・産卵回数共におおよそ同じ割合で減少していることから、砂浜環境の悪化によって産卵ができない母ガメが増えたのではなく、産卵に訪れた母ガメの個体数が減少した可能性が示唆されます。

●CITES附属書掲載種の識別研修を開催しています！

東・東南アジア地域は、世界的に見ても生物多様性が非常に高いにもかかわらず、生物多様性保全のために必要な分類学の知識と能力を持つ人材が不足しています。また、同地域では、国際的に貴重な動植物種の密輸や違法取引も問題となっています。

このような状況に鑑み、生物多様性センターでは、同地域において「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約（CITES）」附属書掲載種の違法取引防止に必要な分類学能力構築を目的に、講師養成研修を毎年開催しています。

平成30年度は、マレーシアにてラン科をテーマとした研修を開催し、ASEAN諸国及びモンゴルから、違法取引防止等に従事する行政機関職員計16名を招聘しました。

研修では、CITESの制度・取組、ラン科植物の識別等の講義のみならず、フィールド実習としてラン科植物栽培施設を訪問し、ラン科植物を観察しながら種の識別実習等も行いました。また、研修最終日には、研修生自らが講師として自国で研修を実施する場合を想定して、各国の実状に応じた研修プランの立案や、それらに対する研修講師からの講評など、実用的な研修となりました。

また、あわせて、平成28年度から30年度に開催した研修受講者へのフォローアップ調査も行った結果、およそ半分の研修生が、すでに何らかの形で自国において実際に研修を行い、本研修の効果が各国内で広まっている事も分かりました。

今後も、このような研修開催を通じてASEAN諸国における分類学能力の更なる向上や若手研究者の育成等を推進していきたいと考えております。

詳しくは、以下のウェブサイトをご覧ください。

■生物多様性センターの国際協力

http://www.biodic.go.jp/international_top/index-j.html



ラン科植物の専門家による講義の様子



フィールド実習の様子

●第22回自然系調査研究機関連絡会議（NORNAC22）を開催！

自然系調査研究機関連絡会議（Network of Organizations for Research on Nature Conservation、通称NORNAC（ノルナック））は、自然環境や野生生物の調査研究を行っている国や都道府県などの機関が集まり、情報交換・情報共有を行う会議です。各機関のネットワークを強めることで、科学的知見に基づく自然環境保全施策を推進することを目的にしています。

NORNACは、平成10年から毎年開催されており、第22回を迎えた今年は11月7日～8日に福井県立三方青年の家で開催されました。

1日目の調査研究・活動事例発表会では、富永修氏（福井県立大学海洋生物資源学部）による基調講演が行われ、福井県若狭町と美浜町にまたがる三方五湖における自然再生事業についてご紹介いただき、外来生物であるブルーギルの対策を進めるために実施したモニタリング調査やその結果のほか、対策を進める上でのモニタリングの重要性についてもお話いただきました。また、各調査研究機関が取り組んでいる調査研究や活動報告について、口頭発表が7件、ポスター発表が16件あり、参加されたみなさんは積極的に意見交換をされていました。

2日目の連絡会議では、福井県海浜自然センターの取組み紹介などがあったほか、エクスカージョンとして福井県年縞博物館を見学させていただきました。



調査研究・活動事例発表会の様子

●生物多様性や自然環境に関する講演を実施しました！

生物多様性センターでは、普及啓発の一環として外部に向けて講演を実施しています。

6月19日には、NECプラットフォームズ株式会社甲府事業所より依頼を受け、6月の環境月間における環境意識向上を目的として同事業所が開催する「環境講演会」で講演しました。当日は約30名の職員が参加されました。

今回は、「日本の自然環境と生物多様性を知る」というテーマのもと、生物多様性や日本と山梨の自然、生物多様性センターが実施する調査（自然環境保全基礎調査やモニタリングサイト1000）について紹介したほか、生物多様性を巡る取組みについても理解を深めていただきました。質疑応答の時間では、積極的に質問や意見をいただくことができ、参加者の方の自然環境に対する意識の高さがうかがえました。

今後もこのような普及啓発を通して、多くの方に日本の自然環境や生物多様性に対する知識・関心を高めていただくと共に、生物多様性保全の取組みの推進を目指していきます。



センター長による講演の様子

●生物多様性センターの企画展示とイベント

生物多様性センターでは、生物多様性の大切さを理解していただくことを目的として、企画展示を開催しています。2020年7月12日までの期間、「山の多様性と生き物の多様性～日本の山はなぜ美しいのか～」をテーマに、日本の自然の大きな特徴である“山”の成り立ちや、自然の美しさを生み出す地形や地質、そこで育まれた多様な生きものたちについて、パネル展示で分かりやすく紹介しています。なかなか目にするのできないライチョウや高山植物、高山チョウなどの標本も展示していますので、ぜひご来館ください。

また、生きものつながりについて楽しく学んでいただくため、毎年夏に「生物多様性まつり」を開催しています。今年度は「あつまれ！いきもの調査員！」をテーマに、生物多様性センターが実施している調査の紹介や調査体験を行い、多くの来場者で賑わいました。

また、6月から11月の間、毎月一回（8月は生物多様性まつり）、自然体験プログラムを開催しました。来年度も開催予定ですので、ぜひご参加ください。



企画展示の様子



生物多様性まつり2019の様子

【2019年自然体験プログラム】

- 6月「夕暮れの森へトワイライトウォーク」
- 7月「つかまえて調べてみよう！虫たちのオドロキのヒミツ」
- 8月「森のガイドウォーク、まつぼっくり釣り」
- 9月「森の不思議な生物キノコを知る！キノコ観察とモビール作り」
- 10月「秋の森でトワイライトウォーク 野生動物たちの冬支度」
- 11月「森のおとしもの 木の実のひみつとリース作り」



9月の自然体験プログラムの様子

生物多様性センターに収蔵している標本紹介 第29回

生物多様性センターでは、『日本の生物多様性を後世に伝える』『日本の自然的重要な地域の生物相を顕す』『生物多様性の理解を深める』という3つの観点から、日本全国に分布している様々な生物の標本を収集しており、現在は65,000点以上の標本が収蔵されています。これらの標本は普段は非公開ですが、このコーナーでは収蔵標本の一部をご紹介します。



ゼニガタアザラシ オス本剥製 生物多様性センター蔵

和名：ゼニガタアザラシ

学名：*Phoca vitulina*

分類：食肉目 アザラシ科

北海道沿岸に生息するゼニガタアザラシ

日本でみられるアザラシ類5種のうちの1種で、流水上で出産し回遊生活を送る他の4種のアザラシ類とは異なり、北海道の東部沿岸や襟裳岬の岩礁に生息し、回遊や季節移動はあまり行わないと考えられています。潜水・遊泳能力が高く、タコやイカ、大型の魚などを捕まえて食べます。

ゼニガタアザラシは、茶色や褐色の毛に白いまだら模様があります。この模様が穴のあいた硬貨（銭・ぜに）に似ていることからこの名前がつけました。他のアザラシの子どもは体が白いことが多いですが、ゼニガタアザラシは親と同じような色で生まれてきます。流水などの氷上ではなく岩場で出産するゼニガタアザラシにとって、岩場に似た体色のほうが天敵に狙われにくいと考えられています。



岩礁にいるゼニガタアザラシ
(写真提供：えりも自然保護官事務所)

ゼニガタアザラシと人間

ゼニガタアザラシは、沿岸生息環境の悪化や肉・毛皮を利用するための乱獲などにより数を減らし、国内では絶滅危惧種に選定されていました。現在では、準絶滅危惧種となりましたが、その反面、漁業被害などが増えています。そのため、環境省では有識者や漁業関係者らとともに、科学的な知見に基づく被害防除対策の検討や個体群管理等の対策を行っています。

●参考文献

藪内正幸. 1994. 海にすむ動物たち 日本の哺乳類II. 株式会社岩崎書店, p.120-123

荒井一利. 2010. 海獣図鑑. 株式会社文溪堂, p.38

加藤秀弘. 2008. 日本の哺乳類学③. 東京大学出版会, p.9

北海道地方環境事務所. 2019. 令和元年度(2019年度)環境省えりも地域ゼニガタアザラシ管理事業実施計画, p.23-25
環境省. 「ゼニガタアザラシの生態」

https://www.env.go.jp/council/12nature/y125-20b/mat01_2-1.pdf (2019年10月28日)

●新任職員紹介

田口 和哉（総括企画官）

2019年1月に赴任しました。学生の頃、「富士スバルライン」（生物多様性センターの前を通り、富士吉田口5合目に至る道路）を自転車で何度か登ったことがあり、懐かしさのあまり、また自転車（ロードバイク）を購入しました！ところが、、、買って早々、スバルラインで転倒し、鎖骨等骨折！！自分が思っている以上に身体が鈍っていたようです。たまに(?)抜けていますが、仕事の方は、担当している自然環境保全基礎調査（中大型哺乳類）など、しっかりと進めたいと思います。

吉川 紀愛（調査科員）

本年4月より、新規採用職員として生物多様性センターに赴任いたしました。生物多様性センターでは、窓口業務、自然系研究機関連絡会議（NORNAC）の事務局業務に加え、重要生態系監視地域モニタリング事業（モニタリングサイト1000）のシギ・チドリ類調査や海鳥の調査を担当しております。環境行政の根拠となる日本全国のデータの収集・発信の大切さを日々実感しております。勉強の毎日です。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



●展示室紹介 つながりうむ

生物多様性についての展示室を一般公開しています。この展示室は、生物多様性のつながりを表現しているため“つながりうむ”と名前がついています。展示室にある扉を開くと、いろいろな動物たちが、生きもの同士のつながりや生物多様性について解説してくれます。



利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 冬季期間（12月～4月上旬）の土日祝日
年末年始（12月29日～1月3日）
- 入館料 無料
※団体でご利用される場合は事前に連絡をお願いします。

交通案内

- 富士急行線・中央高速バスで河口湖駅よりタクシーで約10分
- 中央自動車道路河口湖ICまたは東富士五湖道路富士吉田ICより車で約10分



環境省 自然環境局

生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan

〒403-0005 山梨県富士吉田市上吉田剣丸尾 5597-1
ウェブサイト URL <http://www.biodic.go.jp/>
TEL：0555-72-6031（代表） FAX：0555-72-6032

